

OKoTaC 通信

オコタック

2016年10月28日発行

NO.31



P 2 NPO 活動報告 OKoTaC セミナー

『フィリピンの文化と絵本を楽しもう!』

P 3 多文化な子ども@大阪 のニュース

『外国にルーツを持つ子どもの学習支援ボランティア講座』

ボランティア研修講座『外国にルーツをもつ子どもの地域支援活動について考える』

P 4 みんなの日本語、みんなで NIHONGO! ⑪

『子どもと向き合う対話学習②』

P 5 Air Mail メキシコ便り ㉘

『フチタン (前篇)』

P 6 ころちゃんお役立ち情報(9)

オコタックの活動、阪急百貨店うめだ本店で紹介

P 7 特別寄稿

『日本語指導が必要な生徒のための教材開発(1)』

P 8 イベント情報





おおさかこども多文化センター 活動報告

OKoTaCセミナー

『フィリピンの文化と絵本を楽しもう!』開催



講師の松居友さんと、エープリルリンさん

9月11日(日)、大阪市立総合生涯学習センターにて、フィリピン・ミンダナオ島で地域の村に入って絵本などの読み聞かせ活動、医療支援、就学支援、保育所支援、子どもシェルター、植林等、幅広い活動をされている松居友さんと、奥様のエープリルリンさんをお呼びし、標記セミナーを開催しました。お二人には、映像を交えて、フィリピンの子どもの様子やフィリピンのお話文化、絵本を紹介していただきました。フィリピン語話者3人を含めて、総勢30名の参加がありました。

セミナー参加者のお一人・大島真美さんが感想を寄せてくださいましたので、ご紹介します。(Y. M)



セミナーに参加して――

(大島 真美)

フィリピンのミンダナオ島からどんなお話を届けてくれるのだろうか、興味津々、期待を胸に会場へ足を踏み入れました。

絵本を通じてフィリピンの文化を垣間見たいという思いから参加を申し込みましたが、思わぬ貴重な出会いと体験に恵まれ、非常に幸運でした。心のこもった語りを聞かせて頂いた講師の松居友さんと松居エープリルリンさんに感謝しております。

松居友さんは、1998年にフィリピンのミンダナオ島へ渡り、2003年にNGO「ミンダナオ子ども図書館」を立ち上げられました。そして、その館長としてミンダナオ島の紛争が絶えない地域の支援、特に子どもたちの支援に全力を注いでこられました。子どもたちがとにかくかわいい、とにかく明るい、そこに惹かれたと、冒頭で愛おしそうに表情で語っておられたのが印象的でした。

今も続く紛争により、両親を失う子どもたちが後を絶たない。しかし、彼らは決して死なない。お互いの友情や愛情で助け合って生きていける。私たちの方が、そんな彼らの心の強さに勇気づけられ、大事なことを教えられると語っておられた松居さん。そんな松居友さんの語りからは、子どもたちの持つ大きな力が伝わってくるようでした。

小さい頃から、口頭での語りを聞いて育った子どもたちは、読み語りや驚くほど上手く、もの凄く表現力を持っているようで、ミンダナオ島へ来て初めて、松居さんのお話が生きている社会を知ったとのことでした。

本当にあっという間の限られた時間でしたが、『サンパギータのくびかざり』、『せんそうはもういや』、『Maghapon namin ni Nanay(母さんとの一日)』という3冊の絵本の読み聞かせもして頂き、会場全体が惹きつけられ、それらのお話に聞き入っていました。

本当にあっという間の限られた時間でしたが、『サンパギータのくびかざり』、『せんそうはもういや』、『Maghapon namin ni Nanay(母さんとの一日)』という3冊の絵本の読み聞かせもして頂き、会場全体が惹きつけられ、それらのお話に聞き入っていました。

「人間らしく生きる」ということを教えてくれるのが絵本であり、それを語り継ぐのがミンダナオ島の子どもたち、そして私たちでもあるのだと感じました。

★「ミンダナオ子ども図書館(MCL)」ホームページ: <http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>



会場に並んだ、松居さんが書かれた絵本や著書



『外国にルーツを持つ子どもの学習支援ボランティア講座』

(多文化共生センター大阪主催)

9月から10月にかけて上記講座を全4回で開催しました。第1回は、「外国にルーツをもつ子どもについて・・・学校と地域での関わり」と題した、多文化共生センター大阪の坪内好子さんの講演でした。子どもたちの背景、家族の



生活環境、学校で子どもたちが困っている事は何か、そのためにはどのようなサポートが必要かなど、わかりやすいお話で、子どもたちを取り巻く環境の概要を理解していただけたのではないのでしょうか。講演後は3つのグループに分かれ、具体的な支援活動についてサタディクラス(以下サタディ)のボランティアが、参加者からのいろいろな質問に答えるかたちで進められました。そのなかでみなさんにはこの活動への興味をさらに深めていただきたいと思います。

第2回は、「当事者とボランティアの思いを語る」というテーマで、サタディに通っていた中国ルーツの女子高校生とフィリピンルーツの男子高校生2人とボランティア2名との座談会でした。" 来日時の気持ちや日本ででの生活、学校、勉強、受験について " " サタディがどのように役立ったか " " 将来の夢は？ " などの質問に子どもたちが答えました。2人が語った中で嬉しかったことは、ボランティアに感謝の気持ちを伝えてくれたこと、そして、将来の夢として「同じような外国人の子どもを教える先生になりたい」、「野球で学んだことを、指導者としてフィリピンで伝えたい」など、2人とも人のためになることをやりたいと話していたことでした。

この記事が出る頃には終わっていますが、10月22日の第3回「在留資格・入管法について学ぶ」をRINKの木村雄二さん、10月29日の第4回「教科支援をどのようにするか・・・中学校理科について」を元帰国した子どもの教育センター校担当の井上泰雄さんに講演をしていただきます。 (サタディクラス ボランティア 児島良謙)

ボランティア研修講座『外国にルーツをもつ子どもの地域支援活動について考える』

(こどもひろば・(公財)大阪国際交流センター共催)

上記連続講座の第2回目は10月16日、阿倍野市民学習センターで開かれ、大阪府教育センター教育相談室の適応指導教室グループ相談員で臨床心理士でもある金松美さんが講演されました。金さんは子どもの話を傾聴することの大切さについて語られ、受講生はカウンセリングのスキルでもあるうなづき、あいづち、言葉の繰り返し、明瞭化など、子どもの話の聞き方のロールプレイを体験しました。後半は5つのグループに分かれ、出された事例について、どのような支援が可能かについて話し合われました。グループワークの中にも入られた金さんは、複雑で難しい事例を聞き、ボランティアの限界を訴える受講生に、子どもたちには、一生懸命話を聴き、関わってくれた大人がいたということは心に残っているはずなので、たとえ問題解決はできなくとも、支援をする周りの大人たちが、しっかり子どもの話に耳を傾け、信頼関係をつくりながら関わっていくことが大切だと結ばれました。



(H. K)

第3回 当事者が語る外国にルーツをもつ子ども支援の現状と課題

【場所】阿倍野市民学習センター 研修室 (最寄駅:谷町線「阿倍野」駅すぐ、JR「天王寺」駅徒歩10分)

【日時】11月20日(日)13:30~16:30

【定員】35名 【参加費】全3回参加¥1,000(参加費1回¥500)

【申込み】名前、所属、電話番号をEメールまたはFaxでお知らせください。(要予約)

【申込み先】(公財)大阪国際交流センター E-Mail: ih-johokikaku@ih-osaka.or.jp FAX: 06-6773-8421



みんなの日本語、みんなで NIHONGO ! ⑪

『子どもと向き合う対話学習②』

甲田 菜津美（大阪大学大学院生）

前号では、小学生に対するボランティア教室での取り組みについて書きましたが、今回は中学校の放課後支援、高校の取り出し授業での取り組みをご紹介します。

【中学生を対象に：放課後学習支援にて】

対象の中学生に勉強アレルギーがあったため、教科にとられない対話活動を心がけています。生徒の日本在住歴は長いので「話す」ことに問題はほぼありませんが、「書く」ことを極端に嫌がったため、対話をメインにし、生徒の関心のある内容から発展させ、好奇心を養う活動を行いました。そこで母国を誇れるトピックの事例をご紹介します。

母国の偉人について扱った時、宇宙飛行士を生徒が選んだので、その偉人の伝記や宇宙に関わることについての記事を読み、内容を話し合いました。その内容をまとめてスピーチをする、という彼にとっては初めての挑戦をしました。最初は「絶対にスピーチしない」と嫌がっていたのですが、原稿が書きあがっていくにつれて「どこで発表するん？こんな初めや」と気にするようになり、恥ずかしがりながらも生徒にとって人生初のスピーチをすることができました。生徒の関心のあることを活用する、支援者が面と向き合って否定しない、褒める、の積み重ねで学習に向き合えるようになってきています。



【高校生を対象に：取り出し授業にて】

対象の高校生はなかなかクラスに溶け込めない生徒だと聞いていたため、これは原学級とのつながりを意識した取り組みの事例です。日本語に関しては、まだ初級前半レベルだったのですが、初級のうちから作文活動を取り入れて「書く」ことに対する苦手意識を取り除くよう努めました。また「書く」ためには読んでくれる人がいなければ、書く意義が感じられません。そこで、原学級の仲間に作文を読んでもらい、感想をもらうという活動を行いました。



作文を書くための材料を対話によって引き出し、話した事柄をまとめて添削し、清書する→原学級で取り扱ってもらう→感想をもらう→友達の感想を読み理解する、という活動に挑戦しました。クラスみんなに読んでもらいたいという意識が非常に高く、このときばかりは、宿題をしっかりとってきてくれていました。（普段もしっかりやってほしいですが…）そして今では交友関係もしっかり育っているようで、クラスの友人の話を楽しそうにしています。

学齢期には、一人一人の子どもの状況に応じた学習支援が必要だと思えますが、まずは子どもと気長に向き合い、子どもの発話を否定せず傾聴の姿勢で受け入れることにより、次の学習ステップに進むことができるのではないのでしょうか。教育に関する取り組みは今すぐに結果が出るわけではありません。長期スパンで考え、必ず子どもにとってプラスになると信じ、目の前の子どもと向き合うことが必要だと思います。また、子どもたちが楽しく日本語を学ぶためには、支援者側の大人が何よりも支援内容を楽しむことが大切だと思います。



メキシコ便り②⑧ 「フチタン(前篇)」

(オコタック会員 金野広美)

先日、インディヘナ(先住民)についての授業で、メキシコには女系社会が存在し、ムシエと呼ばれる女性として生きる男性が多く暮らす町があるというフィルムを見ました。それはオアハカ州にあるフチタンという人口9万人の町です。またここではすばらしいウイピルという刺繍の民族衣装が作られているので、別の伝統工芸の授業でもこのフチタンが取り上げられました。フチタンでは男性が夜明けの4時ごろから朝7時ごろまで魚を取り、それを女性たちが加工して市場で売る。女性が経済と家族の中心に座り、働いているのは女性ばかりで、男性はお小遣いをもって、魚を取った後は一日中ぶらぶら過ごしているというのが、その授業での先生の説明でした。しかし、私はムシエの話はともかく、女系社会の現存と、男性が3時間ほどしか働かないという話にもわかには信じがたく、そのフィルムがフチタンの経済を担う女性を賛美しているのに違和感を感じました。なぜってここフチタンはインディヘナのサポテコが多く暮らすところ。概してインディヘナ



の世界には男尊女卑的な考えが根強くありますし、それにメキシコはなんといっても伝統的にマッチョ(男らしさを賛美する考え方)の国です。しかし、もしそのフィルムが伝えていることが本当なら、とても興味深いことなので、この目で確かめるべく、フチタンにセマナ・サンタの休みを利用して行ってみることにしました。

4月3日、金曜日の夜行バスに乗りメキシコ・シティーから南に12時間。朝8時にバスは小さなターミナルに着きました。荷物を置くとさっそく町の中心にある、女性が多く働くという市場に行ってみました。市場はおびただしい数の店舗が、まるで迷路のように広がっていました。魚、肉、野菜、果物、花、民族衣装と、あらゆるものがここで揃うのではないかと多彩さでした。私はおなかがすいていたので、塩で焼いた大きなかつお一切れを買って食べました。きつ朝、取れたものなのでしょう、脂がのってやわらかくて本当においしかったです。縦10センチ横20センチくらいの大きさに15ペソ(約150円)、安いです。

ここフチタンは日中はとても暑いのですが、夜になるとさわやかな風が吹き、とても気持ちよくなります。私も夜風に誘われるように、ホテルの近くの小さな教会に行ってみました。すると明日のパレードの用意をするために40人あまりの人たちが集まっていました。男性たちが1メートルくらいの椰子の葉っぱの、上から3分の1くらいのところに15センチほどの椰子の茎を十文字にくくりつけ、十字架を作っています。女性たちはコーヒーや軽食を用意して長いすでおしゃべりしています。300本作らないといけないとかで、男性たちは子どもたちにも手伝わせて頑張っています。横で



見ていた私にもコーヒーが運ばれてきました。「見ていただけなのにどうもすみません」とありがたいたきながら、ここで夫婦で歯医者をしているというポルフィリオさん、リリアナさんに女系社会の有無と、私の感じている疑問を投げかけました。すると彼らは女系社会については「昔はどうか知らないけれど、今はもうないと思うよ。それに男はあまり働かないなんてことはないよ。男も女も協力して暮らしているよ。現にうちもそうだし、どっちかが力を持っているとかいうことはないですよ」と、顔を見合わせながら答えてくれました。「やっぱり、男が3時間しか働かないなんてことはないんだ。それに女性ばかりが働いているということでもないし、女性が男性より力を持っているということでもないのか」と、いろいろ考えていると、彼が「明日は朝7時にみんなここに集まり、パレードをするのであなたもいらっしゃい」と言ってくれたのでちょっとわくわくして、早起きすることにしました。

ころちゃんお役立ち情報 (9)



～ さあ 無料アプリ・ボイストラ(VoiceTra)で世界中の人と話しましょう！ ～

 **VoiceTra** <http://voicetra.nict.go.jp>

2020年に開かれる東京オリンピックに向けて、情報の多言語化の開発が今、急ピッチで進められています。その一つとして、多言語対応の音声翻訳アプリ・ボイストラがあります。今回はこのボイストラを紹介したいと思います。

国立研究開発法人情報通信研究機構(NICT)が提供する「VoiceTra」は、話した内容を外国語に翻訳します。現在、世界31言語に対応できるように開発中です。

ボイストラを使うと、外国の方と会話ができます。アプリを起動したスマートフォンのマイクに向かってしゃべると、指定した外国語に訳された音声流れ、文章を表示します。見やすい画面でしかも操作が簡単、翻訳結果が正しいかどうか確認できます。

しかし、まだ文字での入力・表示のみしかできない言語もありますが、順次開発が進み、音声付きになり、言語の数も増えていきます。2016年10月現在、英語、中国語、韓国・朝鮮語、ポルトガル語、インドネシア語、ベトナム語、ミャンマー語ですが、随時対応言語は増えています。旅行会話はもちろんのこと、学校現場で、日本語がわからず来日してきた子どもや保護者との会話に使えますよ。無料でダウンロードできるのは魅力ですね！一度試してみてください。



オコタックの活動、阪急百貨店うめだ本店で紹介

(オコタック副理事長 村上自子)



阪急グループの社会貢献活動として一般財団法人H₂Oサンタが行う「チャリティネットワークH₂Oプログラム」に、オコタックの活動が取り上げられました。7月から10月まで、阪急百貨店うめだ本店の9階と12階のチャリティーガイドコーナーに活動紹介ポスターと募金箱を設置していただいていたのですが、10月8日(土)には9階祝祭広場で、私がインタビューに答えるという形でオコタックの活動を紹介する機会をいただきました。そして、そこにお集まりのお客様に、オコタックの活動趣旨と内容をわかりやすい言葉と映像で紹介しました。このようなことは初めての経験で、とても緊張したのですが、司会者の方の巧みな問いかけに、自然にスムーズに答える事ができました。そして折よく、10月15、16日に開催した「多文化にふれる えほんのひろば」の告知もすることができました。司会者からは以下のような感想をいただきました。

祝祭広場の皆様はおそらくほとんどの方がはじめて聞かれる話題だったと思うのですが、うなずいてくださる方がいつもにも増して多かったと思います。「そういえば、身の回りにもそんな境遇の子どもがいたなあ。そんな思いをしていたのか」といったことに気付いた方もおられたと思います。

詳しい報告は下記のサイトに掲載しています。

<http://www.h2o-retailing.co.jp/h2o-santa/blog/03/00459442/?catCode=181001&subCode=182003>



特別寄稿 『日本語指導が必要な生徒のための教材開発(1)』

—教科学習につなげるための日本語指導教材の開発と実践—

有本昌代(大阪府立門真なみはや高等学校教員)

編集部より

今年度のオコタック総会後に有本さんに講演をお願いしました。簡単な報告は『OKoTaC通信』29号で行いましたが、事務局からより詳しい内容の執筆を依頼したところ、快諾いただきました。3回連続掲載の第1回目です。

1. はじめに

平成26年の文部科学省の調査結果によると、日本語指導が必要な外国人児童生徒の数は約29000人を超え多様化しつつある。外国人児童生徒数が増えることで異文化理解などが深められるきっかけとなる一方、受け入れ体制や日本語指導においては課題が残されている。具体的には、限られた時間数の中で日本語や教科知識を学び、進学あるいは就職などの卒業後の進路につなげることは容易ではない。そんななか、近年特に課題とされているのは、教科学習を理解するための学習言語としての日本語の育成である。従来の日本語教育というのは成人向けで、文法学習や読解を中心とした指導が主流であった。しかし、高校生の場合は、抽象概念を理解したり、社会へ目を向け考えを深めたりするといった思考力の育成と認知活動も学校教育における重要な教育の一部である。そのため、日本語がすべての教科学習の基礎、土台となるということを踏まえると、学校教育での日本語教育と教科学習を結びつけることが最も大切である。そこで筆者は教科の理解に必要な基本となる語彙や知識を生徒たちに学ばせ、考える力を育成することが重要だと考え、現在学習言語としての日本語学習教材の開発に取り組んでいる。

2. 「教科学習につなげる内容重視の日本語学習教材」の開発

2-1. シラバスの特徴

小中高生の場合は成人学習者とは言語習得の方法が異なり、特に中高生は言語や認知においては発達段階にあるため、言語学習だけでなく思考力や表現力の育成も重要な課題である。さらに2020年からは大学入試制度改革が実施され、大学入試にプレゼンテーションなどが取り入れられ、思考力、発表力が重視される。そんななか外国人生徒の場合も同様で、日本語の四技能を育てるだけでなく教科の語彙や知識、考える力を育てることが重要だと考えられる。現在開発に取り組んでいる教材は高校生向けで、内容重視の日本語教材である。それは日本語学習だけでなく様々な活動を通し総合的実践的に日本語を学びながら教科学習へ橋渡しをすることを目的とする教材である。

一例として高校2年生の社会では歴史を学ぶが、外国人生徒は日本の時代の名称や基本となる時代の流れや代表的な人物の名前を知らない。そこで日本史の授業で教科内容を深く学ぶ前に、日本語の授業で日本の歴史をテーマにした読解教材を用い、基礎となるキーワードと知識を前もって学んでおくのだ。そうすれば当然、授業での理解は深められるだろう。そこで本校では日本語学習における高校3年間のシラバスを立て、トピックを作成した。

今回は以上のことを踏まえ、日本語指導のシラバスの立て方の具体例を示したい。



『外国人家族のための 高校進学説明・相談会』

(大阪府福祉基金地域福祉振興助成金事業)

子どもは日本の学校に行っているが、親は日本の学校に通った経験がない。子どもが希望する高校や、入試についてよくわからない。また母国の中学を卒業後に来日した いわゆる“ダイレクト”であるため、高校の情報が十分に得られない。—— そんな外国人家族のための進学説明会です。

日本の学校システムや高校の種類、入試制度や必要経費まで、詳しくお伝えします。

受験生だけでなく中学1、2年生の保護者の方もおいでください。

【日 時】 11月19日(土) 14:00～16:30 (受付13:30～)

【場 所】 大阪市立阿倍野市民学習センター 講堂

(大阪市阿倍野区阿倍野筋3-10-1-300 あべのベルタ3階)

地下鉄谷町線「阿倍野」駅⑦出口より直結

地下鉄御堂筋線・JR「天王寺」駅より徒歩8分

近鉄南大阪線「大阪阿部野橋」駅より徒歩8分

【参加費】 無料

【対象者】 日本語を母語としない家族、学校教員、地域の支援者

【内 容】 大阪府の高校にはどのような学校があるのか、入学するにはどのようにすればいいのか？
府立高校・私立高校など、高校でかかる費用、日本の教育システムなどについて。

※ 個別教育相談会もあります。

※ 中国語・英語の通訳あり。

(その他の言語も対応できる場合があります。11月4日までに、下記まで問い合わせてください)

【申込み】

子どもの名前、学校名、学年(年齢)、参加人数、言語、および通訳の必要な人は言語名を記入の上、
11月12日(土)までに、Fax または E-mail にて、下記まで申し込んでください。



NPO 法人 おおさかこども多文化センター (OKoTaC) 代表 濱名猛志

〒550-0005 大阪市西区西本町 1-7-7 CE 西本町ビル 8階

Tel/Fax 06-6586-9477

E-mail osakakodomo@gmail.com URL <http://okotac.org>

郵便振替 【記号・番号】00940-1-272824

(他金融機関からは【店名】〇九九(ゼロキウキウ))

【店番】099【預金種目】当座【口座番号】0272824

口座名義『NPO法人 おおさかこども多文化センター』

(フリガナ: トクヒ) オオサカコドモタブンカセンター

